
天国へのカウントダウン 番外編

コナンおたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国へのカウントダウン 番外編

【Nコード】

N7093R

【作者名】

コナンおたく

【あらすじ】

あのツインタワーでの爆発事件の後、コナンたちは事情聴取のために警視庁にいった。そこで、どうやってビルから脱出できたのかを高木刑事とメグレ警部に説明した。ほとんどコナンと灰原が慎重に説明していたのだが、思わぬ邪魔が入った。

ばれる(前書き)

この小説を読む場合は劇場版名探偵コナン5弾「天国へのカウントダウン」をご覧ください。たほぅがよろしいと思います。なんだかこう
いう正体がばれそうになるの大好きなんですよね〜！

ばれる

あのツインタワーでの爆発事件の後、コナンたちは事情聴取のために警視庁にいった。そこで、どうやってビルから脱出できたのかを高木刑事とメグレ警部に説明した。ほとんどコナンと灰原が慎重に説明していたのだが、思わぬ邪魔が入った。

歩美「灰原さんってばすごいのよ！なんだか意味の分からない研究者っぽい話をしていたの。ね、光彦君！」

光彦「え、ええ。あれは物理の事でしたよ。隣のビルに飛ぶのは無理だ、つかいっていましたよ。僕でも半分位しかわかりませんでした。」

コナンと灰原は（やば！）と思った。いままでは慎重にその話に触れないように話してきたのに…このことがばれて2人が天才だという事になれば、世間にしられる。そうすれば黒の組織たちも不審に思うだろう。江戸川コナンは実は高校生探偵工藤新一、そして灰原哀の本当の正体も宮野志保だという事がばれてしまう。

コナン「だ、だーからー、それは新一兄ちゃんが僕たちにまえ教えてくれた事で、そんなに難しくはないよ！」

適当にごまかした。また、「新一兄ちゃん」が教えてくれたということに。だが、高木刑事の目はごまかせない。コナンは明らかに嘘をついている。コナンの目がそういつてる。

高木刑事（コナン君はいつも色んなことをしている。なぜそれを隠さなきゃいけないんだ？工藤君は一回もコナン君の話をしなかった。そんなに親しいのなら、なぜ工藤君はコナン君の名前を口にしなかったんだ？もしかして、コナン君は本当は工藤くんなんじゃ…）

けど、高木刑事だつていまコナンに「君は工藤新一君かい？」ときいても「うん。そうだよ。」なんて答えが来ないことぐらいわかっていた。こんなに長くものあいだ隠していたのに、いきなり「そうだよ。」なんていうわけがない。そこで、高木刑事は警察なりの考えが思い浮かんだ。

そう、指紋調べだ。

ばれる(後書き)

素人ですみません。あまり上手ではありません…

高木刑事の行動（前書き）

おたくです！すごく変な絶対になさそうな展開ですけど…

高木刑事の行動

高木刑事「メグレ警部！少しのあいだだけ検視官を2人ほど借りてもよろしいでしょうか？個人的な事なんですがとても気になる事があるのですが…」

メグレ警部「ああ、それならいいぞ。今ちょうど2人ほど手が空いているからな。ただ変な事に扱いつかうんじゃないぞ。」

高木「は！有難うございます！」

高木は検視官を二人呼んだ。

高木「すまないが、2人とも指紋を調べてくれないか？調べてほしいのがあるんだけど…その人達は 江戸川コナンと工藤新一だ。」

検視官「は！分かりました。」

高木（よし、これですこし安心できるぞ。もしコナン君だけ触った事がある何か…そうだ、お守りだよ！あの服部君のお守りには、服部君とコナン君の指紋しかついていないはずだ…）

~~~~~1時間後~~~~~

検視官「高木巡査部長！工藤新一と江戸川コナンの指紋が一致しました！」

高木「よし。ありがとうー！」ねですっきりしたー！

## 高木刑事の行動（後書き）

もうアイデアが底についた…

何書けばいいかな…

アドバイスください！

あと話の内容でもしよいとおもつのがあればおしえてください。

真実はいつも一つ… (前書き)

アイディアをくれた友達のなっちゃん、ありがとう！

真実はいつも一つ…

グレ警部「知りたいんだが、誰を調査していたのかな？」

高木「ここだけの話ですが、工藤新一と江戸川コナンの調査を行っていました」

メグレ警部「ほんとかな？」

高木「本当です。で、結果では、最終的に、一致しました。」

メグレ警部「コナン君を呼んでくれ」

高木「はい。」

メグレ（そうか…似ているとは思っていたが、まさか本当に同一人物だったとは…正直驚いたな。）

そして、コナンが来た。

コナン「高木刑事とメグレ警部、どうしたの？僕の事呼んだのって、2人でしょ？」

高木「コナン君、僕たちは君に大事な話があるんだ…聞いてくれるかな？」

ドキッ。コナンは焦った。まさか、まさか本当の正体ばれてしまったのか…???いや、いつも考えすぎなんだよ、おれは…実際に、

いままでずっとばれなかったじゃねえか。いまさら、いまさらねえ…まさか。

コナン「うん、いいよ。」

高木「あの、その、コナン君僕たちに何かかくしてるよね？すごく大事な事。そのことを君の口からききたいんだけど。」

や、やば！やっぱばれてしまったのか？！隠し事といえば、自分の正体ぐらいだ。もうにげられねえな…黒の組織はまだつかまってるねえが、もうこうなったらしかたねえな…

コナン「ふっ…やっぱりばれちゃったね…僕の正体の事だよ、高木刑事とメグレ警部？」

高木「まあ、そんなところだよ…きみは、小学生ではないんだろう？」

コナン「うん…小学生じゃないよ…」

高木「じつは高校生探偵なんだろう？」

低い大人びた声でコナンは下を向きながら言った。

コナン「うん…俺はじつは、もう知ってると思うけど…工藤新一なんだ…」

一瞬の沈黙。そして、コナンは頭をあげて、手を頭の後ろに組みながら、笑って言った。

コナン「やっぱばれちゃったね〜！けどさ、どうして俺が高校生探偵工藤新一だつてこと分かったの？証拠でもあったの？」

メグレ「ああ。実は指紋を調べてな、君の指紋と工藤新一のが一致したんだ。そこで、いままでの疑問がやっと晴れたっていうわけなんだよ。」

コナンがまたもや下をむいて言った。

コナン「そっか……やっぱ、ずっと真実を隠す事なんて、むりだよね…真実はいつも一つだもんね…」

maybe to be continued . . . . .

真実はいつも一つ…（後書き）

これへたっすねー！  
分かりにくい文章ですいません…

走る

コナン「あ、あのさ、この事、だれにも言わないでくれる？」

高木「あ、ああ。いいけど、なぜだい？どうして君はそんなに正体を隠そうとするんだい？」

コナン「いろいろと僕なりに事情があつてね…お願いだから、この事だけは誰にも言わないで！」

バツ！

コナンがいきなり椅子をでて走っていった。

メグレ「あ、工藤君…じゃなくて、コナン君！」

ハア、ハア…

コナンは走っていった。

毛利探偵事務所に。

~~~~~

コナン(どうする?ばれちまったぞ!しかも警察たちに。ハアハア。警察がもつと深く調査したら、俺がトロピカルランドで黒の組織に毒薬を飲まれた事がばれちまうぞ!黒の組織の事をもつと調べようとして、ハアハア、下手な行動をすると俺の正体が奴らにはれちまう!そうしたら俺の周りの人達も被害にあう可能性が高い!ハアハア、よし、ここはFBIのジョディ先生にきいてみるか…)

ピッポツパツポ

コナンはジョディ先生に電話をかけた。

ジョディ「OOhh、Cool Kid、どうかしたの?こっちはうれしいニュースがあるんだけど。」

コナン「え?まあ、今こっちは大変な事になってるんだけど…そのニュースを先に聞いてもいい?」

ジョディ「実はね、あの黒の組織が逮捕されたのよ!秀(赤井秀一)がいきなりできてね、いきなりジンの腹部を銃でうったのよ。このニュース、あなたにはうれしい事なんじゃない?いつも気にしているし。」

コナン「え!?!?!?!組織が、逮捕された!?組織の全員が!?!?!?!?!」

ジョディ「ええ、そうよ。全員っていつても、20人弱ほどしかいなかったけれど。それでcool kid、貴方のその話っていうのはなんなの?」

ツーツー

もう電話はきれていた。

ジヨデイ「え、え？hello, cool kid!？いるの？
おい！」

コナンは探偵事務所に入っていた。組織が破滅した？！もしそれが本当なら…蘭に、俺の正体を…

一応テレビについてあったニュースをチラッと見た。そこには、「悪の組織Black Organization全員逮捕」と書いてあるではないか。しかも、そこには顔見知りの写真が…千葉刑事だ。

しかも、千葉刑事の写真のうえには「BOのボス」と書いてある。ま、まさか、千葉刑事がボスだったのか？！探偵のくせに、ぜんぜんきづかなかった…

ガチャッ

蘭「あ、コナン君、もう帰ってきたの〜！今待ってたね、夕飯の支度いまするから！」

コナンはいま蘭に正体をばらそうか、と考えていた。もう組織は破滅したんだ…もうばらしてもいいよな。

コナン「あ、あのさ、蘭。」

蘭「もう〜コナン君！『蘭ねーちゃん』でしょ？何回いったらわかるの！」

コナン「これは…まじめな話なんだ！」

蘭「えっ」

コナン「あのさ、蘭、いままでずっとだまってきたんだけど、もうばらしてもいいとおもうんだ。俺の正体なんだけど…じつは、江戸川コナンなんて人物いねーんだよ。俺は…」

蘭「し、新一なの？」

コナン「えっ」

したを向きながらコナンは言った。

コナン「ああ。俺は高校生探偵、工藤新一なんだよ。」

空手

蘭「やっぱり…私、コナン君が新一だってこと分かってたんだよ？
けど、弟みたいなのコナン君が新一と同じ人なんてこと、認めたくな
かったの。真実が怖かったの。コナン君と新一が違う別々の人だっ
たらいいなって思ってたんだけど…やっぱ本人の口から聞くと、真
実だって事が分かっちゃうもん…だから私、新一の口からきけるま
で待ってたんだよ？」

コナン「ごめんな、蘭…おめーがちょうつらい思いしてたって事は
すぐくわかってたのによお、探偵しっかくだよな、本当に…」

したを向いている蘭。いきなり顔をあげた。

蘭「もういいよ！いくらあやまっても、私の気持ちなんて新一には
わからないよ！」

怒りが爆発した。

コナン「だから、俺ちゃんとあやまってるんだろ?!他に何ができ
んだよ!俺は工藤新一で、毛利蘭じゃねえから蘭の気持ちなんてわ
かんねえんだよ!」

コナンも怒りが爆発した。もうこの世のものとは思えないほどの大
きな声で叫んでいた。

コナンが叫び終わると、あたりが急に静かになったようにおもえた。
5秒ほどの沈黙。そして、

蘭「そうだよな…新一には、私の思いなんてわからないよね…」

・私さ、すごく辛い思いしてきたと思ってたけど、新一はもつと辛かったんだね．．．体が小さくなって、正体隠して、それでも私の事を守るうとしてきたなんて．．．ねえ、どうして体が小さくなったの？」

そう、これはだれでも聞きたくないクエスチョンだ。（クエスチョン笑）

コナン「ああ、それなら長くなるけど．．．」

全部話した。BOの事、灰原の事、APT X 4869の事。誰がコナンの正体を知っているのかも話した。服部平次、灰原、博士、両親、本堂英助、ベルモット．．．

蘭は平然として聞いていた。途中で遮ることもなかった。コナンは話しやすかった。終わったころでも、蘭は始めたときと同じ表情をしていた。いたって普通な表情。真剣な顔。

kyoko kohno - 蘭「へえ、まあ考えていた事に近かったからあんまりびっくりしなかったけど。さてさて、いま思い出しましたが、本題に入りましょうか．．．」メラメラメラ．．．

コナン（ゲツ！もしかして、お風呂に一緒にはいった事とか一緒に寝た事とか思い出してるんじゃないやねえだろな．．．もしそうだったら、俺空手でやべー事になるぞ．．．）

そのまさかだった。

蘭「工藤新一君？君、私と一緒に、一緒に、」

シユ〜

ボコ！スポポコダンドンバン！！！！！！

コナン「いつて~~~~！ひでえな！俺はこれを恐れて正体隠して
たんだぜ！？」

まあ4分の1ぐらいあっていたのだが、まさか蘭が真に受けるとは
コナンは思っていなかった。

蘭「え・・・そ、そうだったの？」

コナン（うっ！こいつ、真に受けやがったし・・・）
子供の声でコナンは言った。

コナン「んなわけないでしょ、蘭ねえちゃんったら！ぼく、そんな
理由で隠すわけないよ！」

蘭（う、恐るべし新一の演技力・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7093r/>

天国へのカウントダウン 番外編

2011年10月8日21時04分発行